

中部の

エネルギーを 築いた

人々

駄知陶業中興の祖・籠橋休兵衛

～駄知町営電気、駄知実業銀行、駄知鉄道の功労者～

岐阜県土岐市は美濃焼の産地であり、織部焼発祥の地でもある。そして現在の土岐市は陶磁器生産日本で市内の各地域によって、駄知町はどんぶり、土岐津町は湯呑み、肥田町は皿、下石町は徳利、妻木町はコーヒ椀など得意とする分野が分かれている。

この駄知町で明治維新後、美濃焼の窯元となり陶磁器商を始め、東京にあった実業銀行を誘致して駄知実業銀行を設立、また窯業の機械化が進み、その動力となる電気が今後の窯業の発展に必要と考え、1913(大正3)年に駄知町営電気事業を開業、さらに多くの原料、燃料の石炭、陶磁器などの輸送ため1919(大正8)年に駄知鉄道(株)を設立するなどの3大事業を興し駄知陶業中興の祖と言われる籠橋休兵衛を紹介する。



籠橋休兵衛

〔1841(天保12)年～1921(大正10)年
出典:籠橋休兵衛翁伝記〕

その生涯

籠橋休兵衛は1841(天保12)年、土岐郡駄知町に籠橋定助の二男として生まれた。籠橋家は庄屋を務める家柄で、19歳の時、兄の定兵衛が急逝し、農業を引き継いだ。

明治維新後、駄知町の美濃窯業界にも大きな影響があり、岩村藩の「窯株制度」や陶器商にあった「仲買観察」制度などが廃止された。そこで休兵衛は製陶業と陶磁器商を始め、多治見に進出、中国などに輸出した。また籠橋家が中心となって東京にあった実業銀行を誘致し、1904(明治37)年に駄知銀行を設立した。1910(明治43)年に美濃陶磁器同業組合長に推薦され就任。そして翁の生前における報徳の一端として紀功碑の話が持ち上がり建立された。しかし翁が長命だったので功績も全般を記述することができなかった。

駄知町白山神社境内にある籠橋休兵衛紀行

碑の記載は次の通りである。

「籠橋休兵衛紀功碑文

美濃土岐郡駄知町、維新の後大いに富庶す。蓋し陶磁器業の盛んなるに由るなり、陶磁器業の盛んなるは、実に籠橋翁率先の力に由る矣。翁、名は休兵衛、天保12年3月、家に生まる。性寡黙勤勉、歳十八九、澗水池を修めて、水田十許町を得たり。二十二組頭となる。しきりに凶年に遇い、飢民を救い、及び、其租を代輸す。里人嘗て土瓶を製す。而も、陶土に乏し、翁山中に求めて之を獲たり。ここにおいて大井を製す。大井とは盤盂を謂うなり。休兵衛井と称し、これを清国に輸して巨利を獲たり。里人これを倣ふ。ここに於て四方来たり、業に就くもの相踵ぎ、翁乃ち、巷街を開いて屋舎を建つ、人又休兵衛新道と称す。およそ陶窯、必ず松を焚く。翁則

ち他財を雑え、その費を減ず。屢、陶磁業諸
 会委員、若しくは評議員となる。今美濃陶磁
 器組合長たり。多く内外博覧会共進会の賞碑
 を愛く。駄知覺は県下の楷模たり。翁あづか
 った力あり、県、金を給賜りふて之を賞す。嘗
 て村長となり、また村会議員たること20年、
 近ごろ実業銀行を創め、頭取に挙げられる。
 よはい既に七旬、公私のために尚力をいたす、
 偉なりと謂はざるべんや矣。我町人、まさに
 碑を樹てその功を紀せんとなす。余曩茲郡に長
 たるを以て、来たって文を乞う。夫れ、翁の
 功、自ら内外にことごとく播く、官之を旌す、
 まさに日あるべし。豈余輩の俟たんや。因
 ってその聞知する所を略叙すと云う。

岐阜県知事正五位勲三等薄定吉篆額
 従六位勲五等水谷弓夫撰並書
 明治四十四年九月建立」

その後、大正時代に入ると、大正農園の開
 拓(約1万坪)や、窯数16基に達する大正焼き



駄知町白山神社境内にある籠橋休兵衛紀功碑

の操業など各種の事業を進めた。

また、町内を流れる肥田川に水力発電所を
 建設するために駄知町営電気事業の設立、駄
 知町と土岐津町を結ぶ駄知鉄道などを設立し
 たが、鉄道が開業する4か月前の1921(大正
 10)年に81歳の生涯を閉じた。

このように郷土の3大事業の功績を残した
 略歴は次の通りである。

籠橋休兵衛の略歴「1841(天保12)～1921(大正10)」

西暦	和暦	履 歴
1841	天保12	土岐郡駄知町に籠橋定助の2男として生まれる
1871	明治4	美濃窯焼きを始める(年3回から12回の焼成に挑戦)
1891	明治24	陶磁器仲買業も始める
1904	明治37	籠橋家が中心となって駄知実業銀行を設立
1910	明治43	美濃陶磁器同業組合長に推薦、就任
1911	明治44	籠橋休兵衛翁紀功碑建立
1913	大正2	駄知町営電気事業開業、大正農園1万坪を開拓
1915	大正4	大正焼を操業
1919	大正8	駄知鉄道(株)を設立
1921	大正10	死去
1922	大正11	駄知鉄道の新土岐津～下石間開通、昭和3年に全線開通(土岐津～駄知間)

駄知町営電気事業の設立

(1) 駄知水力発電所の沿革

駄知町は、1911年(明治44)逓信大臣に電
 気事業経営認可申請書を提出、翌年、電気事
 業経営の認可を得て、駄知町第一発電所(出
 力：50kW)の新設工事に着手し、1913年(大
 正2年)完工し、営業を開始した。発電所は
 丸山地区にあり、肥田川溪谷の名所・稚児岩

近くに発電所跡を見ることが出来る。

当時の電力需要は、電灯電力使用戸数751
 戸、灯数1209個、動力使用戸数2戸、使用
 馬力6馬力であった。その後、第一次世界
 大戦後の好景気で電力供給不足になったた
 め、第二発電所(出力：35kW)の建設に着手し、
 1920年(大正9)完工させた。その後も陶磁

器の生産が急増し、土岐郡営電気(購入電力：50kW)や大同電力(購入電力：100kW)などから電気を購入し急場をしのいだ。

その後もニューヨークに端を発した世界金融大恐慌が、陶磁器業界にも影響を及ぼし、電力の余剰をきたした。このため、第一発電所の運転を1926年(大正15)に休止させたりして調整した。そして陶磁器焼付け用電熱利用の需要開拓を図ったので、再び供給不足になり、土岐郡営電気組合より1927年(昭和2)に100kW、大同電力より1934年(昭和9)に50kWの電気を購入し送電した。

このように、駄知町営電気事業の経営は、順調に伸び、毎年多額の剰余金をだし、町の財政が潤った。このため1928年度(昭和3)より、各戸1灯を生活灯として大割引を行い、病気その他生活困窮者には一定期間10燭光1個を無料とした。また、門灯は街の繁栄ならびに町民の保安上の社会施設として、約半額にて点灯し、その他、街燈を全町に設置し、明るい駄知町として知られた。

(2) 駄知水力発電所の概要

駄知発電所の概要は次表のとおりである。

	駄知第一	駄知第二
竣工	1927(大正2)年	1934(大正9)年
所在地	駄知町大字丸山	駄知町大字地京平
出力	50kW	35kW
水路	285間(約518m)	267間(約485m)
落差	78尺(約24m)	66尺(約20m)
工事費	30,100円	25,000円

(3) 町営電気事業記念塔

駄知町で登り窯をイメージし、デザインされたどんぶり橋がある。この近くに道の駅「土岐美濃焼街道・ドンブリ会館」や「町営電気事業記念塔」がある。この記念塔は町営電気事業25周年を記念して1937(昭和12)年に建てられたも



どんぶり橋の近くにある町営電気事業記念塔

ので、裏面には下記のとおり建設経緯が記載されている。

「町営電気事業記念塔

駄知川北流して肥田村に入る處兩岸壁を為し急湍巖を噛む我郷人地を滋に相し発電所を設け燭爐動力の資に供せんと欲す明治四十一年十一月書を官庁に致し同四十五年二月認可せられ大正二年六月竣工即日営業を開始せり水路延長二百八十五間水路直下七十八尺電力計量五十キ口建設費総計金三万百四円也越て大正九年一月第二発電所を駄知川上流川谷峽に増設せり此の水路延長暗渠隋道を合して二百六十七間水路六十六尺電力三十五キ口建設費計金式萬五千余円也而して郷勢日に月に伸張戸百余里密を加え応用益旺盛を極め既設電力を以て遂に欠乏を告ぐるに至れり奇大正九年更に他の電力を購ひて之を補填し今日に及べり蓋明治中世電業知識未だ山村に洽からず之が創設に当たりて人身危惧資金動もすれば梗塞し工程式は渋滞なき能はざる也然かも郷人此間に処して操守を易えず団結に終始し本邦に於て殆ど嚆矢の称ある町営電力事業を完成したるもの洵に是れ我郷信義協和の俗に基因したる者論を待たざる所也矣今會たたま創業二十五年を迎ふるに遭う郷人將に碑を建て之を永遠に記念せんとす辺ち其事績を概録して是を碑背に刻すと云再

創業 大正二年六月一日

事業経営認可 明治四十五年二月二十三日

第二発電所電気工事施工認可 大正八年十二月四日

同事業開始 大正九年一月九日

(寺澤 安正)